笑わない娘

小川未明

青空文庫

あるところに、なに不足なく育てられた少女がありました。
 ただ一人ぎりで、両親にはほかに子供もありませんでしたか
 ら、娘は生まれると大事に育てられたのであります。
 世間にも知られるほどの金持ちでありましたから、娘はりっぱ
 な家に住み、食べ物から着る物まで、ほかの子供らには、とうて
 いそのまねのできないほど、しあわせに日を送ることができたの
 であります。

娘は大きくなると、それは美しゆうございました。目はぱつち
 りとして、髪の毛は黒く長く、色は白くて、この近隣に、これ
 ほど美しい娘はないといわれるほどでありましたから、両親

の喜びは、たとえようがなかつたのであります。

けれど、ここに一つ 両親の心を傷めることがありました。

それは、こんなに美しい娘が、いつも黙って、沈んでいて、うれしそうな顔をして笑つたことがなかつた。

「なぜ、あの子は笑わないだろう。」

「まんざらものをいわないこともないから、おしではないが、いったいどうした子だろう。」

両親は、顔を見合せて、うすうす我が子の身の上について心配しました。

なにしろ、金はいくらもありますから、金でどうにかなることなら、なんでも買ってやって、娘の快活にものいい、楽しむ

有り様をば見たいものだと思ひました。

そこで、町へ人をやつて、流行の美しい、目のさめるような華やかな着物や、また、飾りのついた人形など、なんでも娘の氣に入りそうなものを、車にたくさん積んで持つてきて、娘の前にひろげてみせました。

娘は、ただ一目それを見たぎりで、べつにほしいともうれいともいわず、また、笑いもしませんでした。両親は、娘の心を悟ることができなかつた。

「なにか、心から娘を喜ばせるような美しいものはないものか。いくら高くても金をば惜しまない。」と、両親は、人に話しました。

そのことが、ちょうど旅たびから入り込んでいた、宝石屋ほうせきやの耳みみに、はいりました。すると宝石屋ほうせきやは、ひぎを打うつて喜んで、これは、ひと一もうけできると心こころで思いながら、その金持かねもちの家いえへやってきました。

「どんなに、気きの沈しずんだお嬢じょうさんでも、私わたしの持もつてきた、宝石ほうせきをごらんになれば、こおどりしてお喜よろこびなさるにちがいありません。それほど美うつくしい、珍ちんき奇きなものばかりです。」と、箱はこを前まえに置おいていいました。

両りょうしん親しんは、娘むすめさえ喜よろこんで、笑わらい顔かおを見みせてくれれば、いくらでも金かねを出だすといつて、さつそく娘むすめをそこへ呼よびました。

しとやかに、娘むすめは、そこに入はいつてきました。そして、両りょうしん親しん

のそばにすわりました。

「お嬢さん、これをごらんください。」といつて、宝石屋は、箱のふたを開きました。すると、一時に、赤・青・緑・紫、さまざまの石から放った光が、みんなの目を射りました。

両親はじめ、平常それらの石を扱っている男までが、目のくらみそうな思いがしましたのに、娘の顔は、びくともせず、かえつて、さげすむような目つきをして、冷ややかに見下ろしていたのであります。

「お嬢さん、こんな美しい石をごらんになったことがありますか？」と、宝石屋は、驚きの目をみはっていました。

「私は、毎夜、これよりも美しい星の光をながめています。」

と、むすめ娘は平気で答こたえました。

さすがに、じまん自慢のほうせきや宝石屋も、この答こたえにびつくりして、はこそうに箱をかか抱えて、その家いえから逃にげ出だしてしまいました。

やがて、このことと、むすめ娘が沈しずんでいて笑わらわないといううわさが、せけん世間に伝つたわりました。

あるところに、その話はなしを聞きいて、たいへん娘むすめに同どう情じょうをして、どく気の毒どくがったおじいさんがあります。そのおじいさんは、もう頭あたまが真まつ白しろでした。そして、背せが低ひくく、いつも太ふといつえをついて歩あるいていました。

わたし「私の考かんがえるに、その娘むすめは、詩人しじんというものじや。ほうせき宝石より空そらの星ほしが美しいとは、いまどきには、めずらしい高こう潔けつな思想しそうじや。

平常、沈んでいるのも、ものをいわないのもよくわかるような気がする。私がいって、その娘にあつてやろう。」と、おじいさんはいって、独りできめてしまいました。

おじいさんは、つえをついて、ある日、その家をたずねました。そして、自分は娘を救いにやってきたことを両親に話しました。

両親は、この老人が、徳の高い人だということを知っていました。そして、そのしんせつを心から感謝しました。

「どうしたら、娘がもつと快活にものをいったり、笑ったりするようになるでしょうか。」と、両親は、老人に問いました。

「性質せいしつというものは、そう容易よういに変わからないものじゃ、けれどお嬢じょうさんは、金持かねもちの家にいえ生まれながら、衣服いふくや、宝ほう石せきなどよりも、空そらの星ほしを愛あいされるところをみると、たしかに詩人しじんになられる素質そしつがあるようだ。そういう人ひとを教きょう育いくするには、物ぶつ質しつではいけない。やはり音楽おんがくや自然しぜんでなければならぬ。趣味しゆみ、そういう方ほう面めんの教きょう育いくでなければならぬと思おもわれる。これから、私わたしは、お嬢じょうさんに、音楽おんがくを教おしえ、自然しぜんを友ともとすることを教おしえましょう。もつと生うまれ変わかつたように、快活かいかつなお方かたとなられると思おもうじゃ。」と、老人ろうじんはいいました。

両りょう親しんは、これを聞きくと、たいそう喜よろこびました。そこで、この老人ろうじんに、娘むすめの教きょう育いくを頼たのみました。老人ろうじんは、娘むすめに音楽おんがく

を教おしえました。また広ひろい圃はたけにはいろいろくさばなな草花なを植うえました。
 あるときはその花はなの咲さいた園そのなかの中で、楽がつき器なを鳴ならしました。小鳥ことり
 は、その周しゅうい囲いの木き々ぎに集あつまってきました。美うつくしいちようは、ひ
 らひらと飛とんできて花はなの上うえを舞まいながら、いい音おん楽がくのしらべに
 聞ききとれていみるようみに見みえました。こんな日ひが幾いく日にちもつづきま
 したけれど、娘むすめは笑わらいませわらんでした。笑わらわないばかりでなく、前まえ
 よりもいつそかお顔いろの色あおじろが青あお白しろく、やつれて見みえるのでありまし
 た。両りょうしん親しんはたいそう心しん配ぱいしました。老ろうしん人じんは、不ふ思し議ぎに思おも
 いました。

「なんで、あなたは、そんなに憂うれわしい顔かおつきをしておいるのじゃ
 。」と、老ろうしん人じんは、娘むすめにききました。

すると、娘は、目にいつぱい涙をためて、

「この真つ赤な花卉に、晩方の風がかすかに吹き渡るのをながめますと、私はたまらなく悲しくなります。音楽の音色も私の心を楽しませることはできません。」と、娘は答えました。

さすがに徳の高い老人も、このうえ娘を快活にする術を考えることはできなくなりました。そして、暇を告げて、老人はどこへか、つえをつきながら立つてしまいました。

このうわさは、また世間に広がりしました。

「だれか、あの金持ちの娘を笑わせるものはないか。」と、人々はいいました。

このことを、ある年の若い医者が聞きました。その医者は学

者やでありました。そして、あまり世間せけんには顔かおを出ださず、いっし
 ようけんめいに研けん究きゆうをしてしているまじめな人ひとでありました。医い
 者しやはこの話はなしを聞きくと、興きよう味みをもちました。

「その娘むすめは、一種しゆの精せい神しん病びよう者しやにちがいなかろう。診しん察さつをし
 て、できることなら自じ分ぶんの力ちからでなおしてやりたいものだ。」と思おも
 いました。

年としの若わかい、まじめな医い者しやは、金かね持もちの家いえへやってきました。両り
 親ようしんは、医い者しやの話はなしを聞きいているうちに、もしや自じ分ぶんの娘むすめは、精せい
 神しん病びよう者しやでないかというよううたがな疑いいを抱いだきましたから、

「どうぞ、早はやくご診しん察さつをしてください。そして、あなたのお力ちから
 でなおることなら、どうぞなおしてください。」と、医い者しやに頼たのみ

ました。

「いしや医者は、むすめ娘について、いろいろしんさつ診察をしました。けれど、し心んぞう臓は正しく打うっており、はい肺は強つよく呼こきゆう吸をし、どこひとつとしくるて狂っているところはないばかりか、すこしもせいしんびようしや精神病患者らしいところも見みうけなかつたのです。

「なぜ、あなたは笑わらいませんか？」と、まじめないしや医者は娘むすめにたずねました。

「わたし私には、どうしても笑わらえないのです。」と、娘むすめは答こたえた。

「なぜですか？」

「なぜだか、それが私わたしにもわからないのです。」と、娘むすめは答こたえませんでした。

医者は、それは自分の研究すべき領分でないことを感
 じました。そして、頭をかしげて、その家から去ってしまったの
 です。

そのころ、ちょうど旅から曲馬師が、この村に入ってきて、
 この話を聞きますと、

「若い時分には、そんなような性質の娘さんがあるものだ。私
 は、よくその娘さんの気持ちを知っている。」といいました。

この年をとった曲馬師は、堅いしんせつな人でありました。
 ある日、娘の家へたずねてきて、

「私に、娘さんをおあずけください。きっと快活な、愉快な人
 にしてあげますから。」と申しました。

両親りょうしんは、大事な娘むすめを、旅たびの曲馬師きよくばしにあずけることを躊躇ちゆう

躇ちゆうしましたちよが、その人ひとがたいへんにしんせつな、正直しょうじきな人ひと

だということがわかりましたむすめものですから、娘むすめに聞いてみました。

「私わたしは、遠い国とおくにの知らない町まちを見たいと思おもっていましたから、ど

うかやつてください。」と頼たのみました。

曲馬師きよくばしは、両親りょうしんから娘むすめをあずかりました。娘むすめは、その人ひと

たちの一行こうに加くわわつて、故郷こきやうを出しゅつ発ぱつしたのであります。

それから、娘むすめは南の町まちへゆき、あるときは西にしの都みやこにまいりまし

た。そして、いろいろの人ひとたちに交まじわりました。春はるも過すぎ、夏なつも

ゆき、はやくも一年ねんはたちました。両親りょうしんは、娘むすめのことを案あんじ

暮くらしていました。

ある日の暮れ方に、不意に娘が帰ってきました。両親は、見違えるように我が子の美しく、快活になつていたのに驚いたのです。

「どうして、おまえは、そんなに生まれ変わったように、おもしろそうに笑うようになったか？」と問いました。

「だって、世の中は、愉快なんですもの。」と、娘は答えた。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人之友」

1921（大正10）年4月

※表題は底本では、「笑《わら》わなない娘《むすめ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

笑わない娘

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>